

『帝国主義論』における段階規定

——『資本論』から『帝国主義論』への発展と関連して——

島 津 秀 典

はじめに

レーニンは、かれの労作『帝国主義論』において、「帝国主義とは、資本主義一般の基本的諸特質の発展およびその直接の継続として生じた」ところの「資本主義の特殊の発展段階である」と規定することによって、帝国主義を「概括、総括」し、「帝国主義とは、資本主義の独占段階である」という「簡単な定義」をあたえている。

本稿は、このようにレーニンによってあたえられた帝国主義の段階規定はいったいどのように理解すべきかについて、それを、『資本論』から『帝国主義論』への発展との関連において究明することをその課題とする。

一

『資本論』における資本の分析にあたっては、産業資本と銀行資本とは、現実的には分離しながらも同時に並存するものとしてわれわれの眼前にあたえられている前提である。この前提は、レーニンのいうように、「資

本主義一般に固有のことである」という事実にもとづくものである。

「資本の所有と資本の生産への投下との分離、貨幣資本と産業資本あるいは生産資本との分離、貨幣資本からの収入だけで暮らしている金利生活者と企業家および資本の運用に直接たずさわっているすべての人々との分離、これは資本主義一般に固有のことである」⁽¹⁾

『資本論』での資本分析においては、このような「資本の分離」を前提として資本概念が展開されている。

$G-W-G'$ という表面的で規則的な事実の分析にもとづいて「貨幣の資本への転化」で「剰余価値を生み出す価値」という、もつとも抽象的なかたちで資本概念がわがものとされる。そのあと、この資本概念は、「所有そのものがその果実を生み出す」という、もつとも物神的で複雑な利子つき資本にいたるまで展開されることになって、はじめの抽象的で簡単なものから上向の旅をつづけるにつれて最後に複雑なものに具体化されていく。

利子つき資本の具体的形態たる銀行資本についていえば、それは産業資本とは別個に、しかも同時的にあたえられた自立的な資本として存在するという想定のもとに、まずこの資本の表象の分析にもとづいてその本質があらかにされる。そのあと、産業資本の機能と銀行資本の機能のいずれの機能をもそのなかであわせおこなうところの、両資本がいわば「融合」していたより抽象的なカテゴリーとしての産業資本が、いかなる過程を経て、銀行資本を自立した資本として分離させ、しかもそれを産業資本の運動のもとにどのようにして従属・屈服させていくのが展開される。それによって資本概念がしだいに具体化されていくのである。

このようにして『資本論』において具体化されてきた資本概念が、同時に『帝国主義論』にとっての論理的な出発点となっている。すなわち『帝国主義論』における資本概念の展開にあたっての前提は、産業資本と銀行資

本との同時並行的な分離状態なのである。

この産業資本と銀行資本でのそれぞれの部門における資本の集積集中はその発展の一定の段階で自由競争をその「直接的対立物」である独占に転化せしめ、産業資本は独占的産業資本に、銀行資本は独占的銀行資本に転化する。

したがって『資本論』から『帝国主義論』への発展はまず、自由競争から独占への成長・転化でなくてはならない。この発展「過程で経済的に基本的なのは、資本主義的自由競争に資本主義的独占がとってかわった」ことなのである。その意味ではまさに「帝国主義とは独占資本主義である」⁽²⁾。

ところでこの産業資本と銀行資本とは、たがいにその資本部門を越えて、つまりその資本形態にかかわらず、資本にとつての外的強制法則たる自由競争にもとづいて、最大限利潤の追求という規定的目的を遂行するのである。この自由競争にもとづく資本の集積・集中による中小資本の駆逐と大資本ないし巨大資本の成長は、やはりその「発展の一定の段階」で自由競争を独占に転化させざるをえない。産業資本と銀行資本の各部門における独占形成と時をおなじくして、資本形態の区別をこえたところで自由競争が独占に転化する。すなわち産業資本と銀行資本との資本部門の区別にかかわらず独占が形成されるのである。

このように産業資本と銀行資本とに「分離」されていた資本は、それにとつては外的法則である自由競争に強制されて、「資本主義の独占段階」において、産業資本と銀行資本との両部門の相互作用を契機としてふたたび「融合」するにいたる。

「嘗て一たび分離独立した産業資本と貸付資本とは……より高い独占の段階に於て再び融合して金融資本と

なる⁽³⁾」

帝国主義時代における支配的資本は、もはや銀行資本、ましてや「産業資本ではなく、金融資本である」。このことは「金融資本の支配」は、「金融資本が他のすべての形態の資本に優越する」ことを意味している。

資本形態の区別にかかわりのないところでの自由競争の独占へのこのような転化は、「資本一般」から「金融資本」への発展でもある。

「二〇世紀は、古い資本主義から新しい資本主義への、資本一般の支配から金融資本の支配への転換点である」⁽⁴⁾。

『資本論』から『帝国主義論』への発展はしたがって、自由競争から独占への転化であるとともに、資本概念の展開という側面からみるならば、それは、資本の分離にもとづいて自由競争をおこなう資本一般から、資本の融合にもとづいて独占をその原理とする金融資本への発展でもなければならぬ。

以上のことから、わたしは、帝国主義を、「資本主義の独占段階」たらしめる指標を、まず、その基本的特質としての独占、ならびにこの独占原理の担い手となるところの、独占的産業資本と独占的銀行資本との融合体である金融資本の支配にもとめなければならぬ、と考える。⁽⁵⁾

「帝国主義とは、独占と金融資本の支配が形成された発展段階の資本主義である」。

(1) 以下、とくへんのことわりのなにかきり引用文は「B. H. Jemni, *Имперализм, как Базис Снабжения Коммунизма*, Издательство Политической Литературы, Москва, 1965, 副島種典訳『帝国主義論』(国民文庫版)からのもの。ただし、本稿に引用された原書の訳文は、邦訳書の訳文とかならずしもおなじではない。

静田均氏は、この箇所を引用されるさいに、「資本主義一般」のところを、「独占的資本主義」として引用される(静田

『帝国主義論』における段階規定(島津)

均「帝國主義論にかんする覚書」京都大学経済学部創立四〇周年記念『経済学論集』四四三ページ）のであるが、ここでレーニンによって指摘されている「資本の分離」は、「独占」資本主義では「巨大な規模に達している」とはいえ、それがなにも「独占」資本主義に「固有」ではなく、「資本主義一般の固有」なものであることに注意しなければならない。

(2) В. И. Ленин, *Полн. собр. соч.*, т. 23, стр. 103, 『レーニン全集』第三巻、二二二ページ。

(3) 古賀英正『支配集中論』（有斐閣）八〇ページ。

(4) わたしが以下、「資本一般」というばあいには、それは、産業資本と銀行資本との「分離」を前提として自由競争をおこなう資本、あるいはそれにもついた「資本主義一般」（レーニン）のことである。したがってそれは、おのずからいわずに「経済学批判体系プラン」の「資本一般」とは異なった範疇である。

(5) 大島雄一氏は、「資本主義の独占段階への『成長転化』」を、「それ以前の産業資本主義段階と対比」して、「原論風に規定するとすれば、資本一般の分裂＝資本家的平等の止揚およびその上での資本一般の支配から独占資本・金融資本の支配への移行と特徴づけること」（独占資本・金融資本と独占価格・独占利潤）『名城商学』第一四巻第四号、二二〇ページ）によってほぼ正確な規定をされているのであるが、大島氏がいわれる「資本一般」となにかがかならずしもあきらかではないし、また別のところでは、「産業資本主義から独占資本主義への発展をみれば、それはなによりもまず、資本一般の支配から独占資本の支配への転化と特徴づけられる。そうしてこの独占資本の支配は、より具体的には金融資本の支配として現象する」（同右、一三一―二ページ）と規定され、「独占資本」と金融資本とを区別されている。

熊谷一男氏も、「独占と独占資本とは等置さるべきではない」として、「独占」を、「経済および政治のあらゆる面で生み出している自由競争ないし、自主的活動の制限」、「独占資本」を「これら独占を生み出している現時点での資本主義社会の運動の担当者」とそれぞれ規定される（ロシアにおける帝國主義論の確立）『経済学史講座』有斐閣第三巻、なお、おなじ趣旨のことは、「帝國主義の段階規定と独占資本の類型」『経済評論』第一三巻第一一号でも述べられている）。

氏の規定で問題になると思われる点は、第一に、氏は、「独占資本」規定を、「カルテル、トラスト、シンジケート、金融資本などの資本の結合組織」「形態をとった巨大資本」に求めることによって、金融資本を「独占資本」の「組織形態」のひとつとして把握されている。しかし金融資本は産業や銀行の資本部門における独占資本が融合したところの、「帝國主義にとって特徴的な」資本として理解されなければならないだろう。第二に、氏は、「レーニンは、……独占資本を……従来支配的であった産業資本に代るものとして位置づけ」たといわれるが、資本主義の自由競争段階で「支配的であった」のは、もう少

し正確に、銀行資本の機能をもそのなかにあわせもった「産業資本」、あるいは資本の分離にもとづいて自由競争を遂行する資本一般——産業資本ならびに銀行資本——と規定すべきであろう。

二

自由競争とその担い手たる資本一般は、その「直接的な対立物」である、独占とその担い手たる金融資本に転化する。すなわち、それぞれの資本が平均利潤をかくとくする特殊な資本としての資本一般が、その「直接的な対立物」であるところの資本部門にかかわりなく独占利潤を搾取・収奪する特殊な形態の金融資本に転化するわけである。したがってそこでは両者が特殊な資本として「直接的に対立」するのだから、その両者のあいだには媒介的な関係はなんら存在しないものとして把握されている。

ところが、資本一般というのは、自由競争段階の特殊な資本として存在しているだけではなく、資本主義のすべての諸段階の一般的な基礎でもなければならぬ。すなわち、価値法則、剰余価値法則をその主要内容とする資本一般は、その諸段階がいかなる形態を採ろうとも、それらがあくまでも資本主義におけるものであるかぎり、資本主義の諸段階の共通の基礎として認識されなければならないのである。

金融資本はその根底に資本一般の諸法則を基礎としてもっているからこそ、それは資本一般の「直接の継統として生じた」ということができるのであり、また、それによって金融資本を、その基礎である資本一般の採るところのひとつの形態として理解することもできるのである。

しかしながらわれわれはここでもまだ満足することはできない。というのはわれわれはさらに金融資本を、資

本一般それ自身がみずからを特殊化することによって「そのなかから」どうしても生みださざるをえなかったものとして把握しなければならぬからである。それまでは自由競争段階での特殊な資本という狭い範囲内の認識にとどまっていた資本一般は、特殊な資本形態たる金融資本に内的・必然的に発展・転化することによってそれ自身がいつそう具体化されその内容が豊富にされた資本概念となる。

かくして『資本論』であきらかにされた価値法則、剰余価値法則その他の諸法則を内容とする資本一般は『帝國主義論』で金融資本という特殊な資本に発展するのである。

ところで、特殊な資本形態たる金融資本はそのものとして純粹に存在していると考えてはならない。それはあくまでも「資本主義、商品生産、競争という一般的环境のうちにあつて」運動している資本なのである。資本一般から金融資本へ発展したからといって、金融資本において資本一般の内容をなす価値法則や剰余価値法則などが消えてなくなるわけではなく、金融資本はむしろこれらの法則が貫徹している基礎のうえにたちつつ、平均利潤ではなく、独占利潤を搾取・収奪しようとするのである。だからこそ、「独占は、自由競争から生じながらも自由競争を除去せず、自由競争のうえにこれとならんで存在し、そのことによって一連の、とくに尖鋭で激烈な矛盾、あつれき、紛争を生みだす」のである。

これまでの検討からあきらかなように、概念展開の出発点にあつて、もっとも抽象的なカテゴリーとしての資本一般は、それ自身が資本の特殊形態たる金融資本に転化することによって、より特殊化・具体化された資本概念となる。

自由競争段階における資本の運動法則をあきらかにしたといわれる『資本論』は、その段階での支配的資本た

る資本一般が金融資本に発展することに規定されて、「資本主義の独占段階」における特殊な支配的資本である金融資本の運動をあきらかにする『帝国主義論』をもそのなかに包摂したより具体化された資本主義一般の理論体系に発展させられるのである。

したがって『帝国主義論』でいわれる「帝国主義とは、資本主義一般の諸特質の発展および直接の継統として生じた」ところの「資本主義の特殊な発展段階」なのである。いいかえれば、帝国主義とは、金融資本が独占原理にもとづいて独占的超過利潤をかくとくすることによって支配的資本となる、そういう資本主義発展の特殊な段階のことである。

ここから、わたしは、帝国主義を「資本主義の独占段階」たらしめるところの指標をより具体化して金融資本の支配と、独占原理にもとづいた金融資本による独占利潤の搾取・収奪にもとめたい。

この独占利潤は、産業資本によって生産される剰余価値にはかならないのであるが、投下資本量に均等に平均利潤が帰属する資本一般とはことなり、金融資本にとっては、生産ならびに分配過程を通じてその投下資本に不均等に帰属する、ということが金融資本の搾取・収奪する独占利潤にとっては本質的であらう。⁽²⁾

(1) ところが平瀬巴之吉氏によれば「体制的な独占の段階」になると、「資本一般の価値法則は成立しえない」ということになる。

「体制的な独占の段階ともなれば、価値以上に独占価格が長期かつ大量に指令されてくる。すると、この独占価格をふくむ総市場価格のなかには一時的でも個別的でもなく、長期かつ社会全体として、社会の生産過程で生産された実体である総価値を超過する部分が、ふくまれてはいはしないか？ 多少いい方をかえれば価値をこえる独占価格の指令によって実現された独占利潤のなかには、かならずしも実体的なもの（賃金や剰余価値、総じていえば価値の移転再分配）だけでは説明しつくさぬ

部分が、ふくまれてはいはしないか？」（平瀬巳之吉）「独占資本主義の経済理論」 未来社 二七二ページ）平瀬氏はそのような「部分」を「貨幣流通利潤」にもとめられる。

「過去において生産され、現在ではすでに流通界から姿を消し、諸個人の財産となっている富……独占資本がどれだけ万能でも、これら無数の富を直接収奪するわけにはいかない。そのための合法的手段としてこそ、貨幣は存在する。貨幣はすでに諸個人の財産となつて眠る無数の富をふたたび流通界によびもどす……市場で買いを待っている現在商品の価値に対応する貨幣しか存在しないならば……それだけ現在商品の流通が阻害されてしまう……それだからスムーズな商品流通を阻害しないで過去の富を購買（収奪）するためには、現在商品の価値に対応しない余分な貨幣が、市場のどこかにぜひとも存在していなければならぬ。それは存在する。それが価値以上の価格（独占価格）分に相応する独占流通利潤の体化としての貨幣なのであった……」（同右、二九九—三〇〇ページ）

ところが、この「貨幣流通利潤説」は、白杉庄一郎氏によって適切に命名されたごとく、「過去価値再分配説」といってよいもの（『独占理論の研究』ミネルヴァ書房 一一九ページ）であつて、そのかぎりでの利潤は本質的には、平瀬氏自身のように「剰余価値の再分配」（平瀬、前掲書、三〇五ページ）によるものとなんらかわらない。なぜならば、剰余価値のなかから蓄積されたところの「富」や「財産」は、「現在」からみるならば、時間的なズレのために実現されなかつた「過去」の価値部分にはかならないからである。平瀬氏はこの時間的ズレという要因を導入することによって「貨幣流通利潤」を独占利潤の、「体制的独占段階」にとつての固有の、新しい源泉にみせようとしたのであるが、よく検討してみると、じつは、平瀬氏自身が、「貨幣流通利潤」によって社会の総価値がビター一文でもふえるなどといっているのではない」（同右、二九九ページ）とみとめられているのだから、この「利潤」の源泉は時間的ズレをともなつて分配ないし再分配された剰余価値なのである。

(2) 白杉理論によると、独占利潤の基本的源泉は個別的独占企業が他の諸企業とは比較にならないほどの特別に優秀な生産条件にもとづいて、労働者の搾取を通じて生産され、その企業の内部に「固定化された特別剰余価値である」（白杉、前掲書）。

しかし、このような「白杉説……」では独占資本は企業視角においてのみとらえられ、独占資本の本質的性格を生産設備の体制的優位のうちに見出され、……そこから、独占利潤の基本的源泉を、個々の独占企業内で生産された剰余価値にほぼつてゆかれる。そのため、氏の理論においては、独占資本の全体的な支配強制関係がみのがされ」（重田澄男「独占利潤」『マルクス経済学講座』有斐閣 第二巻 一三三—一三三ページ。重田氏による同様の白杉理論批判には、「独占利潤の基本的源泉につい

て(一)『経済論叢』第八四卷第三、四号がある)という致命的欠陥がある。

特別剰余価値あるいは超過利潤は、それがあくまでも「資本起因的な相違」にもとづいて発生するかぎり、一時的、経過的なものであり、その「相違」はおそらくはやかれ競争によって「克服」される。つまり社会的価値と個別的価値、あるいは社会的生産価格と個別の生産価格とが一致するのに応じて特別剰余価値あるいは超過利潤は「固定化」することなく、消滅するのである。白杉理論は、独占利潤が「資本起因的な相違」によって生ずるものであるにもかかわらず、その源泉を「自然起因的な差異」にもとめようとしたわけである(井上晴丸『平均化原理』と「限界原理」『立命館経済学』第一二巻第五・六号参照)。したがって、「資本起因的」な生産条件の差異が、自由競争の貫徹しているものか、それとも自由競争が制限され、その「直接的な対立物」である独占が成立している状態のものであるかによって、発生する利潤が超過利潤か独占的超過利潤かの規定をうける。この後者の意味における「資本起因的」な生産条件がいかなるものであるかを規定することが、独占利潤の実体をあきらかにするうえでの残された問題といえよう。

なお、重田氏が、白杉理論批判に性急なあまり、「独占的諸産業における巨大企業の高い利潤率を、自己の直接的生産過程における剰余価値の搾取から説明することはできない」(「独占利潤」、前掲書、一〇四ページ)とか、「集積のすんだ部門の大企業の直接生産過程における剰余価値の生産から、独占資本の高い利潤率を説明するわけにはゆかない」(同右、一二七ページ)と主張されて、「独占的産業や『独占的』大企業の支配的地位は、剰余価値の『生産』にではなく、『実現』にさいして決定的影響をおよぼすものである。市場支配力による独占利潤の収奪のための基盤がここにあたえられる」(同右、一〇五ページ)と結論されると、独占利潤の実体とその形態という関係を正しく理解できなくなるのではなからうか。

なぜならば、独占利潤は、「収奪」『実現』による「剰余価値の再分配」(平瀬、前出)ばかりではなく、個別資本における搾取の強化をもその源泉とするからである。したがって、もちろん独占利潤の源泉を「直接生産過程における剰余価値の搾取」とそれにもとづく「固定化された特別剰余価値」にのみもとめるのは正しくないとはいえず、「資本主義の独占段階」においては、独占利潤が金融資本の剰余価値生産過程、およびその流通『および分配過程のそれぞれにおいて、「資本主義の自由競争段階」とはどういう異なった形態で搾取・収奪されるのかをあきらかにしていくことが重要なものではなからうか。

三

『帝国主義論』における段階規定(島津)

それでは、諸論者は、帝国主義の段階規定をどのように把握してきたであろうか？

以下、諸論者による帝国主義の段階規定を検討して『帝国主義論』におけるレーニンの規定についての理解をよりいっそう深めてみることにしよう。

まず、帝国主義の段階規定を資本関係ではなく、資本以外のものにもとめる代表的論者としてK・カウツキ
1、ローザ・ルクセンブルグならびに入江節次郎氏の諸見解をとりあげる。

K・カウツキは帝国主義を「一定の『経済的段階』⁽¹⁾ではなく、「特殊な種類の資本主義的政策」と規定した。
「帝国主義とは、それがとつてかわつたマンチェスター主義とおなじように、特殊な種類の資本主義的政策である。これもまた一定の『経済的段階』を意味するものではなかつた」⁽²⁾。

われわれはなにもまず、経済的土台における独占原理とそれの担い手である金融資本とが資本主義の独占段階を規定づけることをあきらかにしたそのあとで、金融資本が経済的土台とその運動に規定されてどうしても採らざるをえない帝国主義的な経済政策の分析にうつっていかなければならぬ。土台である「金融資本の基礎のうえで成長する経済外的な上部構造、すなわち金融資本の政策」にもとづいて帝国主義の段階規定をおこなうと、「帝国主義をその経済からきりはなす」ことによつて、「金融資本というおなじ基盤のうえで可能な他のブルジョアの政策を金融資本の政策に對置する」ことになり、「経済における独占が政治における非独占的な行動様式と両立しうること」をみとめることになるであろう。

ローザ・ルクセンブルグのばあいはどうであろうか。

彼女によると、マルクスが『資本論』で想定したような、資本家と賃労働者とのみなりたっている社会では、剰余価値の実現は困難であるから、その困難の解決にはどうしても資本「蓄積の歴史的諸条件」としての第三者、つまり資本家、賃労働者以外の「非資本主義的環境」が死活の必要となる。彼女は、この非資本が「帝国主義の経済学的説明のために」不可欠であるがゆえに、「帝国主義の段階」規定をこの非資本にもとめたのである。(3)

かくして、ローザにおいては、帝国主義の段階規定は、資本とはまったく別個の原理である非資本によってあてられる。(4)

しかし、『資本論』におけるとおなじように、『帝国主義論』においても、当面の抽象的な論理段階では、非資本はすでに完全に資本化されてしまっているものとしてその分析がおこなわれている。

資本——資本家と賃労働者——だけからなりたっている社会の分析は、資本一般みずからが、その概念展開を通じて、資本主義発展の特殊な段階を画する金融資本を必然的に生みだすことをあきらかにする。この資本一般から金融資本への発展は、「なんら非資本主義的要素を導入することなく、あくまでも資本の論理の合法的な展開としてとらえ」(5)られなければならない。

ローザのように、帝国主義の段階規定を、資本そのものの内部にではなく、その外部にもとめるようになると、「資本の世界的競争の段階」たる「帝国主義段階」の支配的資本が独占的産業資本と独占的銀行資本との融合体である金融資本であることを理解できなくなってしまうのである。したがって、「彼女は外的市場がなければ蓄

積は絶対に不可能だと考えていたので、植民地搾取を資本主義がかなり成熟した段階の産物とみなさないで、むしろ（本源的蓄積の時代以来の）資本主義のあらゆる段階の産物とみなすようになる」⁽⁶⁾のである。

入江節次郎氏は、つぎのような方法的問題意識にもとづきながら資本主義の独占段階を規定される。

「理論体系としての帝国主義、つまり、帝国主義論の体系が、まず、生産の集積という範疇を明確に定立、規定し、生産の集積の発達から独占資本の転化をみちびきだすことをもってははじめなければならない……そして、生産の集積を、資本主義の段階的範疇、独占資本の基礎範疇、帝国主義の基底の・歴史的範疇として定置する……この方法論の内容には、生産の集積の発達から転化して成立する独占資本が、帝国主義の基礎となる資本の存在態様をなすという認識が基礎づけられている」⁽⁷⁾。

「生産の集積」とは、氏によれば、「一国の再生産構造において主導的な工業部門における生産資本の支配的な存在態様が、発達した技術水準にささえられながら、異種生産諸工程の単一企業体への統合によって規制されるようになるということ」⁽⁸⁾である。

そして、「生産の集積は、その発達の特定の段階において、機械制大工業資本を実体的な内容とする産業資本を独占資本に転化させる」⁽⁹⁾。

ここでいわれている「生産の集積の発達の特定の段階とはなにか。……それは、生産の集積が重工業において大規模な縦断的統合という形態において顕在化していく段階としてとらえられる」⁽¹⁰⁾。「第一部門の核的業種である重工業において、生産の集積が顕在化していくことをもって、その必要な条件がみたされ……その核に相当

する業種部門において、大規模な縦断的統合の形態が成立し、この業種を代表するような状態がつくりだされる
とき、じゅうぶんな条件が満たされたとしなければならない⁽¹¹⁾。

このように、入江氏にとっては、「帝国主義段階における独占資本の生産資本姿態の実体について、その技術
的内部構造の特徴を明らかにしていくことが、……この段階における変化した競争の特質が生み出されてくる基
本的要因にせまっていく一方法⁽¹²⁾」なのである。

入江氏は以上のような独自の方法にもとづいて帝国主義の「段階的範疇」を「コンピネーション」にもとめら
れる⁽¹³⁾。

しかしながら、はたして「生産の集積」や「コンピネーション」を、帝国主義という「資本主義の段階的範疇」
たらしめることができるであろうか？

ところで、R・ヒルファディングは、資本の集積・集中を基礎として、主に重工業部門において、資本とく
に固定資本が膨大化すること、それにもなる資本移動（主として流出）の困難化が、「自由競争の止揚」と「コ
ンピネーション」にみちびくものとみている。

「固定資本の巨大な膨脹は、ひとたびなされた資本投下の移動の困難化を意味する。……技術的發展は生産
規模を拡大するし、不変資本、とくに固定資本の大きさの膨脹は、一般にそれにおうじて生産を拡張するとか
あらたな企業を創設するとかするためには、絶対的にますます大きい資本額を必要とする⁽¹⁴⁾。……「重工業では
固定資本がとくに最大の役割を演ずる。ここでは、一度投下された資本の流出がもっとも困難となる⁽¹⁵⁾。……

「この傾向は……結局自由競争の止揚に、したがってまた利潤率の不均等を永続的に形成する傾向にみちびき、

結局はこの不均等そのものが、生産諸部面の分離の除去によって除去されることになる。⁽¹⁶⁾

「重工業」⁽¹⁷⁾で「資本の流出が困難になる」⁽¹⁸⁾ことが「独占への道」⁽¹⁹⁾であり、「資本の増大とその『不動産化 IMMOBILIZIROVANIJE』(NB)は独占とカルテルのもっとも重要な条件のひとつである」⁽²⁰⁾としても、それ自体が、「資本主義の独占段階」規定をなすわけではない。この「段階」は、「生産の集積」そのものによって規定されてはならない。そうでないと、「生産の集積」にもとづいた「大規模企業が組織上の利点からみて必しも、独占化たることを必要とせず、トラスト化することにより却って多くの不利を招くことがあるにも拘らず、一切の支配資本が独占をその最高目的として狂奔する所以」⁽²¹⁾があきらかにされないであろう。

したがって、帝国主義の段階は「生産の集積」というような非資本によって技術的ならびに生産力的ではなく、資本関係そのものによって規定されなければならない。すなわち、資本の最大限利潤の追求過程から必然的に生ずる「生産の集積」という「重要な条件のひとつ」の基礎のうえにたちながら、金融資本がその独占原理をともなつて、投下資本量には比例しない、不均等な独占的超過利潤をわがものとするをもつて、帝国主義の段階規定とすべきであろう。

「非常に大きな創業資本が必要であり」⁽²²⁾、「一度投下された資本の流出がもっとも困難となる」ところの「重工業」においても、そのような「条件」それ自体が段階を画するのではなく、それを「条件」として、「そこで競争が諸小経営をもっとも急速に淘汰してしまつた」⁽²³⁾という状況のもとで、大資本ないし巨大資本が合併・吸収・下請・系列化を通じて中小資本を支配・従属させることによって独占利潤を搾取・収奪することこそが段階規定にとつては重要なのである。

「資本主義の帝国主義段階を特色づける近代的独占が生産の集積と不可分にむすびついて現象している」⁽²⁴⁾とは、いえ、「生産の集積」は、「あくまでも独占の存在を可能にする外的条件にすぎない」⁽²⁵⁾以上、入江氏のように、「生産力的・技術的意味での生産の集積あるいは生産の集積体がそのまま独占あるいは独占体をなすと理解されてはならないであろう」⁽²⁶⁾。したがって、「独占は、たんなる技術的な生産条件の変化によってただちにうみだされるのではなく、一定の技術的条件のもとでの資本主義的な利潤かくとく衝動によって不可避とされる」⁽²⁷⁾のだから、「近代的独占の本質は……生産の集積を現実的条件とし、独占価格や金融的支配をつうじて独占の高利潤を取得することにある」⁽²⁸⁾といわなければならない⁽²⁹⁾。

「生産の集積」についていわれたことと、ほぼおなじようなことが「コンビネーション」についてもいえるわけで、入江氏自身がいわれるように、「コンビネーションそれ自体は、技術的、生産力的概念」⁽³⁰⁾である以上、これをもってそのまま帝国主義という、「資本主義の段階的範疇」とするわけにはいかないのである。

入江氏が指摘されるごとく、「縦断的統合の組織や形態それ自体は、いわゆる産業資本主義の段階にもこれをみとめることができる」⁽³¹⁾のであり、実際マルクスも、「おなじ資本家が紡績と織布を同時にこない自分に必要な煉瓦さえも焼くなどのばあい」⁽³²⁾を例として、資本主義の自由競争段階における「コンビネーション」をあげている。マルクスによると、このような「コンビネーションのばあい」⁽³³⁾、「個々の資本家にとって決定的な意義があるのは、運輸時間の節約・建物や燃料や動力などの節約・原料の品質にかんするより厳密な検査などによる生産費の実際上の節約である」⁽³⁴⁾。「コンビネーション」は、このような「技術的進歩」⁽³⁵⁾とそれによる「生産費の実際上の節約」にもとづいて、「コンビネーション」でない「純粹の企業にくらべて超過利潤をかくとする」⁽³⁶⁾のである。

が、資本一般の支配する資本主義の自由競争段階においては、「コンビネーション」といえども、諸資本の競争過程を通じて、結果的には投下資本量に比例した平均利潤しかわがものとすることができないであろう。

金融資本においては、独占原理に規定されて各個別金融資本にはその資本投下額には不均等な独占的超過利潤がもたらされることになるのであるが、そこでもやはり企業の形態が「コンビネーション」であるかそうでないかということとは帝国主義の段階規定にとっては本質的な問題ではない。なぜならば、「コンビネーション」だからといってそれがかならず独占利潤をわがものとするということとはできないし、「コンビネーション」でない企業が独占利潤を搾取・収奪しないということもいえないからである。

また入江氏によれば、レーニンは、「コンビネーション」を「最高の発展段階にたつた資本主義のきわめて重要な特質」とは規定しているけれども、かれは「コンビネーションを……その（資本主義の——引用者）段階的規定、つまり生産の集積の発達にとってそれがもつ意義を明瞭なものにはしなかつた」⁽³⁷⁾。

しかし、レーニンは、「統計」的にみて、「あたかも、最大規模の企業がすべての部門に一二ずつあることになる」という「おこりうるひとつの誤解をかたづけ」るために、「コンビネーション」をあげて、「すべての産業部門に大きな企業があるわけではない」ことを指摘したのであつて、⁽³⁸⁾そこにおいて「コンビネーション」をもつて帝国主義の段階規定をおこなつたわけではない。

「生産の集積」や「コンビネーション」は、金融資本や独占的産業資本を成立させる「重要な条件のひとつ」であり、帝国主義段階における経済的にきわめて「重要な特質」ではあつても、それ自体がそのまま独占を意味するものではないことを銘記しなければならない。「集積・集中は、独占を成立せしめる『基盤』ではあるが、

しかし独占そのものではありえない⁽³⁹⁾とすれば、「生産の集積がぐくくり出す参入障壁は、資本の運動を規定する内的な利潤獲得衝動そのもののうちに求められねばならない」⁽⁴⁰⁾であろう。

(1) 「宇野理論」においても、「段階の規定づけが、重商主義とか、自由主義とか、帝国主義とかという本来は経済政策論によつて説明されるものによつてなされている」(宇野弘蔵『経済政策論』弘文堂 二六ページ、『経済政策論』改訂版 三三ページ)。したがって「段階論」というのは、経済政策論で一番特徴的な規定が与えられることになる(宇野弘蔵『経済学を語る』東京大学出版会 一〇七ページ)。

(2) „Die Neue Zeit“, 1915, 2, S. 111, cm. B. H. Jenuin, *Полн. собр. соч.*, т. 39, стр. 245, 『ノーマン全集』第三九卷、二三七ページ参照。

(3) ローザは、つぎの彼女の叙述からもわかるように剰余価値実現の場を、「国民経済」のそと、つまり「外国市場」に限定しているかのようである。

「交換がこんなに膨大なものに発達しているのに、なぜ一国民の『経済』と他国民のそれとのあいだに限界をもうけ、『国民経済』などといって、各自がそれ自体として観察される独自の領域であるかのようにかたる必要があるのか。」(高山洋吉訳『経済学入門』日月社 五二二ページ)。

「資本にとつての外国市場は、資本の生産物を吸収し、資本に生産要素と労働力を提供する非資本主義的な社会的環境である」(R. Luxemburg, *Die Akkumulation des Kapitals, Vereinigung Internationaler Verlags-Anstalten G. M. B. H., Berlin*, 1923, S. 288, 長谷部文雄訳『資本蓄積論(上)』国民文庫、四三二ページ)。

ところが、この叙述にづく文節からもあきらかなように、彼女は、「国内市場」においても、「対外的な市場関係」をみとめることによつて、国内において資本と非資本とのあいだでおこなわれる資本蓄積をも「外国市場」におけるそれと同等に取扱っていることがわかる(a. a. O., S. 288, 同右、四三二ページ)。そのうえでローザは、「帝国主義段階」規定を、「資本の自然経済との闘争、商品経済との闘争」という「段階」規定と「区別」して、「蓄積諸条件の残りをめぐる世界を舞台にした資本の競争戦」(a. a. O., S. 289, 同右、四三四ページ)にもとめている。

このように彼女のばあい、帝国主義の段階規定は、資本とは別個にあたえられているのではあるが、それはまた「実現」にたずさわる資本が、「生産」にたずさわる資本に対比してあたえられた規定でもある。

「資本主義的蓄積には、全体としては、具体的な歴史的過程として二つの異なった側面がある。第一の蓄積は剰余価値の生産場所および商品市場において遂行される。……そのもっとも重要な段階は、資本家と賃労働者とのあいだで演じられる。……資本蓄積のもうひとつの側面は資本と非資本主義的生産形態とのあいだで遂行される」(a. a. O. S. 366~7, 同右, 五四九ページ)。

したがって、「ローザのばあい……その第三段階(蓄積諸条件の残りをめぐる世界を舞台にした資本の競争戦)——引用者)こそ、帝国主義にはかならない。だから、ローザにおいても、帝国主義はいちおう、資本主義のひとつの段階、しかも最後の段階として把握されていた」(鶴田満彦「再生産論と帝国主義分析」『商学論纂』第九卷第六号、六三五一六ページ)とはいえず、わたしは、「いちおう」、ローザにおいては、「国内市場」および「外国市場」での非資本がすくなくとも『資本論』の論理段階とは次元の異なった役割を演じている、と理解して、彼女は「帝国主義段階」規定をひろく非資本にもとめた、とみなしたわけである。

(4) 「宇野理論」においても、「資本主義が帝国主義と共に」、「小生産者」や資本主義以前の「旧経済形態」などの「非資本的關係」という資本にとつての「『不純』性をその『本質的特徴』としてくると、……原理と段階論とが別個の展開を必要とする」(宇野弘藏『経済学の方法』法政大学出版局 二一—二二ページ)ということになる。

(5) 本間要一郎『資本論』と『帝国主義論』(『経済評論』第一六卷第一二号、三九ページ)

(6) M・ドップ『経済理論と社会主義(Ⅱ)』(都留重人・野々村一雄・岡稔・関恒義訳)岩波書店 一七五ページ。

(7) 入江節次郎『帝国主義論序説』(ミネルヴァ書房) 一七—一八ページ。

(8) 同右、一二七ページ。

(9) 同右、一三二—三三ページ。

(10) 同右、一三三—三三ページ。

(11) 同右、一三八—三九ページ。

(12) 同右、三四—三六ページ。

(13) 入江氏とおなじような問題意識から熊谷一男氏も、金融資本概念を、「混合企業」にもとめられる。

「金融資本概念の再検討」再構築のころろみを経済理論とどのように関連つけて把えていくべきか……

……産業資本主義下で、個別資本が一産業部門に専心し特別剰余価値を実現していく傾向と、混合企業を形成し市場の変化

に対応しつつ、いずれかの部門で特別剰余価値を實現していく傾向とがみられ、混合企業を中核として独占形成が進行するものと思われる。

……産業資本主義下で生産の集積を表現した混合企業を起点として、金融資本への推転を説明すべきではあるまいか」（『金融資本の概念』『マルクス経済学体系』有斐閣 第三卷一〇七—一〇一—一〇二—一〇三ページ）。

(14) R. Hillering, *Das Finanzkapital*, Europäische Verlagsanstalt Frankfurt, Europa Verlag Wien, 1968, S. 250, 同階次訳訳『金融資本論(中)』(岩波文庫版)一四二ページ。

(15) a. a. O. S. 254, 同右、一八二—一八三ページ。

(16) a. a. O. S. 256, 同右、二一三—二一四ページ。

(17)(18)(19) B. M. Jlemini, *Hoan. coöp. cov. r. 39*, crp. 310, 『レーニン全集』第三九卷、三〇五—三〇六ページ。

(20) Tam ke, crp. 174, 同右、二六二—二六三ページ。

(21) 古賀、前掲書、二四二—二四三ページ。

(22)(23) *Das Finanzkapital*, S. 254, 『金融資本論(中)』一九二—一九三ページ。

(24) 鶴田満彦「近代独占理論とマルクス経済学」『経済学季報』第一四卷第一・二号、五五—五六ページ。

(25)(26) 鶴田満彦「独占と資本蓄積」『商学論叢』第六卷第二号、一六五—一六六ページ。

(27) 同右、一七四—一七五ページ。

(28) 同右、一七二—一七三ページ。

(29) レーニンが『帝国主義論』のなかで引用しているヘルマン・レヴィは「大ブリテン」のばあいについて、「一方では集積の結果、企業には巨大な額の資本を支出しなければならなくなり、そこであたらしい企業にとってはますます大きな資本額が必要とされるようになる」と同時に、「他方では需要が異常に増大したばかりに、企業は、「膨大な量の生産物を生産することによって」「巨大企業とおなじ水準にたつ」ことができる」ということを分析しているが、かれのこの方法は、一方での「技術の不連続性」Ⅱ「企業の絶対規模の巨大化」Ⅱ「最小必要資本量の増大」Ⅱ「市場集中度の高度化」、他方での「集中型寡占」Ⅱ「企業の相対規模の巨大化」Ⅱ「標準資本集中度の増大」Ⅱ「参入阻止障壁の形成」を条件とした、つぎのような論者とその著作での独占分析によって具体化され、受け継がれている。

Paolo Sylos-Labini, *Oligopoly and Technical Progress*, Harvard University Press, Cambridge, 1962.

『帝国主義論』における段階規定(島津)

安倍一成訳『寡占と技術進歩』（東洋経済新報社）。城座和夫「独占と競争にかんする若干問題によせて」（『人文学報』第二〇号）。鶴田満彦「近代独占理論とマルクス経済学」「独占と資本蓄積」。本間要一郎「独占価格・独占利潤論」（『現代帝國主義講座』日本評論新社 第五卷）。北原勇「市場構造と価格支配」（慶応義塾大学『経済学年報』第五集）。高須賀義博「現代価格体系論序説」（岩波書店）。

簡単な指摘としては、P. Baran, *The Political Economy of Growth*, Monthly Review Press, New York, 1957, 浅野栄一・高須賀義博訳『成長の経済学』（東洋経済新報社）。M. Dobb, *Capitalism, Yesterday and Today*, Lawrence and Wishart Ltd., London, 1958, 玉井龍象訳『資本主義——昨日と今日——』（合同出版社）。

- (30) 入江、前掲書、一一八ページ。
- (31) 入江、前掲書、一六二ページ。
- (32)(33) K. Маркс, *Теория Plusовойной Суммы*, часть III, Москва, 1961, стр. 201, 『マルクス＝エンゲルス全集』（大月書店）第二六卷第三分冊、二八五ページ。
- (34) Там же, стр. 201, 同右、二八六ページ。
- (35)(36) *Das Finanzkapital*, S. 264, 『金融資本論（中）』三四ページ。
- (37) 入江、前掲書、八一ページ。
- (38) 星野中「『帝國主義論の体系化』とマルクス経済学の体系性」（『社会科学』第二卷第三・四号、二五九ページ参照）。
- (39) 本間、「独占価格・独占利潤論」、前掲書、五七ページ。
- (40) 鶴田、「独占と資本蓄積」、前掲書、一六四ページ。

四

以上の考察から、わたしはレーニンの方法にしたがって帝國主義を「資本主義の独占段階」として規定せしめるのは、投下資本部門にはかかわりなく、その独占原理を貫徹させながら、資本額には不均等の独占利潤を搾取

・収奪するほどあらゆる形態の資本を独占的に所有することによって金融資本がその支配を確立することである、と考える。したがってこの「段階」規定を非資本にもとめるのは正しくないことがあきらかになったのであるが、つぎに、資本自身によって帝国主義の段階規定をおこなおうとした論者の見解を検討してみよう。

E・ベルンシュタインは、マルクスの資本蓄積論に接すると、「読者は、資本所有者の数がたえず——たとえ絶対的でないにしても、労働者階級の増大に比較して——減少しているという印象をうける」⁽¹⁾が、「これは決して事実ではない」⁽²⁾として、「現在の発展が、有産者の数の相対的減少、あるいは顕著な絶対的減少をしめしていることとめることはまったくのあやまりである。『多かれ少なかれ』ではなく、むしろ卒直に『より多く』である。すなわち有産者の数は絶対的にも相対的にも増加しつつある」⁽³⁾と結論する。

ベルンシュタインにとっては、帝国主義は、「資本主義一般の基本的諸特質の発展」でもなければ、「その直接の継統として生じた」ものでさえもない。すなわち、かれによれば、「『資本論』第一卷末尾の資本主義的蓄積の歴史的傾向……は実際にはまったく貫徹せず、したがってそこに叙述されているような対立の極点にまで発展させる必要はないのである……この章（『資本論』第一卷第二四章——引用者）そのものは、現実の進行がすすむばすすむほどますます意味のないものになるであろうし、また事実そうなる」⁽⁴⁾。

一方には、「叙述」された「資本主義的蓄積の歴史的傾向」、他方には「有産者の増大」という「現実の進行」。そして後者が、前者つまり資本一般とは相対立するものとして無媒介的に対置されている。ベルンシュタインにあっては両者はたがいにはきりはなされた「直接的な対立物」であって、そのあいだには共通の基礎さえ存在しな

いがゆえに、なんらの連関も見出せないものとしてとらえられている。⁽⁵⁾

K・カウツキーは、「ベルンシュタインは、表面的な現象の基礎を研究するまえに、これらの諸現象について判断をくだしているのがかれの方法の特徴である」⁽⁶⁾と批判する。

そしてカウツキーは、ベルンシュタインのいう「有産者」には、資本家、労働者、小商品生産者のいずれもがふくまれていることを指摘し、当時の統計の批判的検討にもとづいて、「生産から競争を排除すること、すなわちすべての経営をただひとつの組織に包括することによって、全産業部門を独占化すること、この独占化はマルクスの死（一八八三年）後をはじめて経済的意義をもつにいたったが、それ以来発展してついに資本主義的諸国民の全経済生活および政治生活をもますます支配するにいたった現象である。……」

一方ではおなじ種類のいろいろな経営をカルテル化したり、トラスト化したりすること、他方では異なった種類の多くの経営を一手に包括すること、これこそ現代の経済生活をもっとも特徴づけるところの現象である⁽⁷⁾と結論する。

カウツキーは、ベルンシュタインより一步すすんで帝国主義は、「資本主義一般の基本的諸特質の直接の継統として生じた」ことを理解した。かくして、「独占」は資本一般によって媒介された。すなわち、カウツキーによって「独占」と資本一般とのあいだには共通の基礎——資本主義一般があることが把握されたのである。

しかし、カウツキーは、「資本主義的諸国民の全経済生活および政治をますます支配するにいた」り、「現代の経済生活をもっとも特徴づけるところの現象」としての「独占化」について指摘はしているけれどもかれには

帝國主義が、資本主義一般がみずから特殊化した発展段階であることは理解できなかった。

したがってカウツキーは、「独占」が資本一般とその「基礎」を共通にするものである、という認識にとどまっていたといふべきであらう。このことは、かれが、「マルクスの集中論がたんに一面的にのみ正しいのではなく、まったく正しいということ、それが資本主義の現実の完全に忠実な描写であるということとは、カルテル、トラストのきわめてよく証明するところである」とか、「カルテルにかなする叙述……それは、経済的發展がマルクスが記述したとは違った方向におこなわれていることを、立証しているだろうか？……この疑問についてわれわれは、静かに『否』と答えることができる」とかという考察にとどまっていることからもあきらかである。

カウツキーによれば、「現実の経済的發展」の結果である「カルテルおよびトラスト」は、マルクスの「記述」したとおりのものであるということが指摘されるだけで、かれには「資本主義一般の基本的諸特質」が帝國主義にいたって「特殊な段階」を画するほどに發展するという認識がないのである。それは、カウツキーが帝國主義を定義して、「帝國主義は、そこにどんな民族が住んでいるかにかかわらず、ますます大きな農業地域を自己に併合せせるか、隷属させようという、あらゆる産業資本主義的民族の渴望である」として、「特殊な発展段階」としての帝國主義ではなく、資本主義一般にも通ずるような規定をしていることに特徴的にあらわれている。

K・カウツキーが、資本主義の独占段階においても、資本主義一般の経済法則がその自由競争段階とおなじように貫徹することをあきらかにしたことにとどまったとするならば、R・ヒルファディングは、資本主義一般の法則、とくに剰余価値法則をその基礎におかずに、「資本の金融資本への転化」⁽¹¹⁾を展開したために、帝國主義

が資本主義の特殊な発展段階であることを理解することができなかった、といえよう。

かれは、「最新の資本主義的發展の経済的諸現象をW・ペティにはじまり、マルクスにおいてその最高の表現を見出す古典的国民経済学の理論体系に組み入れ⁽¹²⁾」ようとしたのであるが、「資本のもっとも高度な、かつもっとも抽象的な現象形態をなすところの金融資本⁽¹³⁾」は、「銀行によって支配され、産業資本家によって充用される資本⁽¹⁴⁾」としか規定されなかった。

それは、「ヒルファァーディングの叙述全体のなかでは、この定義をした章のまえの二つの章では、資本主義的独占の役割が強調されている」にもかかわらず、剰余価値法則という資本主義のもっとも基礎的な法則にもとづいて、産業と銀行のそれぞれの資本部門で、独占的産業資本と独占的銀行資本が形成され、両者の相互作用を通じて両資本が融合することによって金融資本が成立することが分析されていないことをしめしている。だからこそ、「この定義は、そのなかにもっとも重要な契機のひとつ、すなわち、生産と資本の集積は、それが独占にみちびきつつあり、またすでにみちびいたほどにいちぢるしく進展したということの指摘がないかぎりで不完全なのである」。

したがって、ヒルファァーディングのばあいには、資本主義一般の価値法則や剰余価値法則にその基礎をおかずに、それとはことなつたところで資本主義の独占段階規定がおこなわれざるをえないことになる。そのことは、かれが、「独占価格の支配のもとでは」、「価値論が廃棄される」とか、「社会的生産の組織化」の推進力を生産過程ではなく、むしろ分配過程にもとめていることにあらわれている。

「独占価格は、経験的には確定されうるが、その高さは、客観的、理論的には認識されえず、ただ心理的、

主観的に把握されるにすぎない。……客観的な価格法則は、ただ競争を通じてのみ自己を貫徹する。独占的結合が競争を揚棄するとすれば、それはこれとともに客観的な価格法則が実現されうるための唯一の手段を揚棄するものである。価格は、客観的に規定された量たることをやめる。それは意志と意識によってそれを決定する人々のひとつの計算例となり、結果ではなく、前提となり、客観的なものではなく、主観的なものとなり、関係者の意志と意識からは独立で、必然的なものではなく、恣意的で、偶然的なものとなる。かくしてマルクスの集積論の実現、独占的結合は、マルクスの価値論を揚棄するかにみえる⁽¹⁵⁾。

「そこでカルテル化の限界は本来どこにあるのか……その絶対的限界はない……カルテル化のたえざる普及への傾向が存在する。……この過程の結果としてひとつの総カルテルが生ずるのである。……生産の無政府性とともに、物的外観も、商品の価値対象性もなくなる⁽¹⁶⁾」。

「銀行制度の発展とともに、……『中央銀行』は全社会的生産のうえに統制をおよぼすであろう。……信用はその完成においては、……無政府性にたいする組織と統制である⁽¹⁷⁾」。「社会経済の組織の問題は、金融資本そのものの発展によつてますますよりよく解決されるのである⁽¹⁸⁾」。

ヒルファードィングによる金融資本規定と資本主義の独占段階規定の「不完全」さは、金融資本を資本一般の体系に「組み入れる」という論理展開をするばあい、独占利潤の源泉となる剰余価値が生産される産業資本部門における自由競争の独占への転化をその基礎におかなければならぬことをわれわれにおしえている。

エヌ・ブハーリンも、価値法則、剰余価値法則という、「商品生産一般、資本主義一般」における諸法則をそ

の基礎におかないで段階規定をしたために、帝国主義を「純粹」化させざるをえなかった。

「（一九一八年に——引用者）ブハーリンによって……（ロシア共産党「ボ」の——引用者）綱領の古い理論的部分（商品生産一般、資本主義一般の特徴づけに関連した部分）⁽¹⁹⁾——引用者）を完全に削除するか、あるいはほとんど取除くかして、わが党（ロシア共産党「ボ」——引用者）の綱領があたえているような、商品生産と資本主義の発展の歴史ではなく、資本主義の今日の最高の発展段階——帝国主義——と社会革命の時代への直接的な移行とを特徴づけたあたらしい綱領に代えるべきであるという（提案がなされた——引用者⁽²⁰⁾）。

帝国主義は、価値法則や剰余価値法則などの資本主義一般を基礎としてそこから発展した資本主義の特殊な段階ではあるが、そのことは、帝国主義においてこのような資本主義一般の諸法則がなくなってしまうとか、あるいはその作用が貫徹しなくなってしまうとかいうことを意味するものではない。帝国主義は、「商品生産一般、資本主義一般」などという「古い資本主義」の「基底」（後出）のうえにたつところの「上層」（後出）⁽²¹⁾「上部構造」⁽²¹⁾なのである。なぜならば、「資本主義という基礎をもたない純粹の帝国主義は、かつて存在したことはないし、どこにも存在しておらず、今後もけつて存在しないであろう⁽²²⁾」からである。

帝国主義とは、このような「寄木細工的な現実」⁽²³⁾からなりたっているという事実、あるいは「自由競争をともなわないような独占資本主義は世界のどこにも存在したことはないし、これからも存在しないであろう⁽²⁴⁾」という事実を認識しないと、「独占が自由競争から生じながらも、自由競争を除去せず、自由競争のうえにこれとならんで存在し、そのことよつて一連の、とくに尖锐で激烈な矛盾、あつれき、紛争を生みだす⁽²⁵⁾」ことが理解されないで、「固定的な生産体制」⁽²⁵⁾である帝国主義における支配的資本、つまり「金融資本は、資本主義諸大国の国

内における生産の無政府性を廃絶した⁽²⁶⁾ということになってしまっているのである。ところが、帝国主義は、商品生産、資本主義、帝国主義という「異質的な諸部分からなる現実」⁽²⁷⁾であるからこそ、「帝国主義が崩壊するときになわれが直面するのは、上層の破壊と基底の露出なのである」⁽²⁸⁾。

(1)(c) E. Bernstein, *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie*, Verlag von J. H. W. Dietz Nachf. (G. m. b. H.), Stuttgart, 1899, S. 47, 空手芝居論『トニキンストの空手』(『世界大思想全集』春秋社 第四七巻、九七一―八ページ)。

(3) a. a. O. S. 50, 同右、一〇二ページ。

(4) a. a. O. S. 176, 同右、二七四―五ページ。

(5) エルンシュタインに於けるは、「あらゆる科学は、純粹理論と応用理論とに分けることができる。前者は、関係のある経験全体から抽出され、したがって普通妥当なもののみならぬ認識命題からなりたつてゐる。これらの命題は、理論において不変的な要素をかたちづくるのであるが、これらの命題を個々の現象、あるいは実際の個々のばあいに応用することによって応用科学がうまれたり得る」(a. a. O. S. 1, 同右、三五―三六ページ)。

かれは、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」を「純粹理論」(「現実の進行」を「応用理論」の対象としてくるか)のようである。
(6) K. Kautsky, *Bernstein und Sozialdemokratische Programm, Eine Antikritik*, Verlag von J. H. W. Dietz Nachf. (G. m. b. H.), Stuttgart, 1899, S. 49, 山川均訳『トニキンスト主義修正の駁論』(『世界大思想全集』春秋社 七三―七四ページ)。

(7) a. a. O. S. 79―80, 同右、一二五―七ページ。

(8) a. a. O. S. 80, 同右、一二七ページ。

(9) 同右、二三三―三三ページ。

(10) „Die Neue Zeit“, 1914, 2 (Bd. 32), S. 909, cm. B. H. Lemm, *Полн. собр. соч.*, т. 39, стр. 242, 『レーニン全集』第三九巻、二三四―三三三頁参照。

(11) *Das Finanzkapital*, S. 306, 『金融資本論(中)』九三―三三三頁。

(12)(13) a. a. O. S. 17, 『金融資本論(上)』九―一〇頁。

『帝國主義論』に於ける段階規定(鳥津)

- (14) a. a. O. S. 309, 『金融資本論（中）』九七ページ。
- (15) a. a. O. S. 313, 同右' 一〇二ページ。
- (16) a. a. O. S. 321—2, 同右' 一二三ページ。
- (17) a. a. O. S. 243—4, 『金融資本論（上）』三一八—九ページ。
- (18) a. a. O. S. 323, 『金融資本論（中）』一五ページ。
- (19) B. И. Ленин, *Полн. собр. соч.*, т. 27, стр. 106, 『レーニン全集』第二七巻、一二九ページ。
- (20) Там же, стр. 105, 同右' 一二八ページ。
- (21) B. И. Ленин, *Полн. собр. соч.*, т. 29, стр. 147, 『レーニン全集』第二九巻、一五五ページ。
- (22) Там же, стр. 144, 同右' 一五二ページ。
- (23) Там же, стр. 148, 同右' 一五六ページ。
- (24) Там же, стр. 147, 同右' 一五五ページ。
- (25) ハヌ・ブハーリン『過渡期経済論』（救仁郷繁訳）現代思潮社 一七六、一九〇ページ。ブハーリンは「過渡期」において
は「純粹の帝國主義」を否定する。
- (26) 同右' 六七ページ。
- (27) B. И. Ленин, *Полн. собр. соч.*, т. 29, стр. 148, 『レーニン全集』第二九巻、一五六ページ。
- (28) Там же, стр. 147, 同右' 一五六ページ。